

論文の内容の要旨

論文題目

一九六〇年代寺山修司のクロスジャンル論

——詩情の源泉と、自己遡及的批評への途

氏名

堀江 秀史

本論は、表現領域（ジャンル）を問わず縦横に活動した詩人寺山修司（1935 もしくは 36-1983 年）の活動を、通史的、網羅的に捉え、その総体を提示しようとする試みである。

没後三十年を経て、短詩型文学や演劇等、個別のジャンルの研究が進み、ますます評価を高めつつある寺山ではあるが、その活動の総体については依然として印象批評的な概括が散見されるに留まり、実証的、学問的な成果は未だない。本論は、寺山の多彩な活動のうち、主要なものを見做され注目されてきた活動ではなく、その内実が従来明らかになっていなかった写真やテレビなどの映像の分野や、短歌俳句といった詩のみならず、評論やエッセイを含む文学全般を対象とする。本論の中心を占めるのは、そうした活動が顕著に見られ、従来研究の手薄な 1960 年代となる。従って本論は、1960 年代の寺山をクロスジャンル論の観点から捉え直す、寺山研究及び比較芸術研究上の試みだと云える。このように記すと、「通史的、網羅的」という冒頭の文言と矛盾するようだが、従来研究の希薄な 60 年代を描き出すことで、研究に厚みのある 50 年代及び 70 年代以降の橋渡しを行なうこと、そしてジャンルの従来研究の希薄な映像分野での仕事に重点を置き、かつこれまでの研究を総合するのが本論なのであり、その意味で本論は同時に「通時的、網羅的」なものとなる。

学問的関心から寺山研究に臨むとき、最も大きな問題となるのは、書誌の未整備である。それは、従来論であまり重視されてこなかったためでもあるが、そもそも寺山が、単行本化の際に複雑な編集を施し、その全貌を見えにくくしたためでもある。初出の同定と校訂の作業は相当の忍耐を必要とされる。本論はそうした作業を厭わず、可能な限り初出誌から引用することで、寺山への学問的な接近を企てる。

また本論は、寺山の執筆状況を一望して把握できるような「完全書誌」を作成しようと試み、本論には途中段階ではあるがそれを成果として付帯した。こうした実証性の基盤とも云うべき資料は、遺される情報の多い現代作家の書誌はいかに整備し得るかという問題に対して、ひとつの事例と成り得るだろう。また、彼の文学以外の活動は、著作とリンクする形で同時並行的に進められており、彼のクロスジャンルを考えるにあたっては、その著作の変遷を視野に入れつつ、そこに並べる形で映画制作や演劇など、その他のジャンルの活動を考える必要がある。完全書誌は総合的な寺山像を描くうえでも大きな役割を担うだろう。

本論は、序章、終章を除くと、四部十章の構成となっている。

第Ⅰ部「詩情の源泉——人物・ダイアログ・〈私〉」は、それ自体が従来研究をまとめるものとなるよう努めた。とりわけ、第一章の寺山の人物史及び、第二章後半の〈私〉論は、これまでに厚い蓄積がある。第二章前半の「ダイアログ」という問題系に関しては、これまでに研究の蓄積がなく、ここで詳細に説明を加えた。寺山がよく使用したテーマや素材が、ダイアログ及び〈私〉論の要請によって導かれるものであることが、第二章では論証される。

第一章「生きられた時間の記述」は、人物としての寺山の評伝を記すものである。まず、「評伝」なるものが孕む原理的な問題、即ち、そもそも実際の出来事を書くとはどういうことなのか、なぜわれわれは、会ったこともない寺山のことが書けるのか、といった原理論を構築し、その上で寺山を巡る出来事（伝記的事実）の論述を行なった。まず、フィクションとノン・フィクションの境をいかに寺山が崩したかを紹介し（第一節）、寺山に実際に起きた出来事＝歴史を確定するために使用する根拠は何かという問題を、次に考えた（第二節）。結論としては、フィクションかノン・フィクションかは、テキストの外の情報からしか確認できないという、特段に珍しいものではないのだが、そのように分けた後のテキストの種類について、チャトマン、ジュネットなどを援用しつつ、分類を試みる。第二節の内容では議論が抽象的になるため、実際に寺山の自伝を使って、この分類について解説するのが第三節である。第四節は、寺山の評伝を、〈土地〉に着目して記した。第五節は、1960年前後の寺山の様子とを中心的に論ずる。その頃は、ジャンル越境の端緒といえる様々な出来事と、結婚の問題があった。前半では、一九五八年頃から六〇年代前半までの伝記的記述を通じて、寺山がいかに様々な藝術の専門家らと人間関係を結んだかを述べる。後半は、結婚をめぐる事実関係を確認する。母と生じた軋轢を、作品が助長したという作品の解釈もここに入っている（ラジオ・ドキュラマ『いつも裏口で歌った』）。

第二章「主題と素材の力学」は、テーマ論である。寺山の数あるテーマを、ダイアログと〈私〉の二つのテーマから再編する。第一節は、しかしそもそも寺山の評論や詩その他の文学作品からテーマ論を展開することの困難について論じた。寺山には文言の重複が多く、かつ、重要なものほどそうであるので、歴史的な変遷を追うことが困難だという特殊な事情がある。そうした寺山研究の事情に引きつけ、テーマ論一般の（不）可能性＝偶然性も論ずる。

第二節、第三節はダイアログ論である。定義のための記述に先立って、寺山が六〇年代を「評論の時代」として過ごし、70年代を「対話の時代」として過ごしたという新たな時代評語を設定した（第二節）。第三節では寺山のダイアログを「自分のところを、あらゆる手段を駆使して、その場に即すように伝えること。かつ、伝えることによって、自らに変革をもたらすこと。（この衝突の産物として、作品が創出される。）」と定義し、その意味するところを記した（第三節）。

第四節は、寺山のテーマとしてもっとも有名な〈私〉論を、従来の議論を紹介しつつ、時系列にまとめた。従来研究にある通り、その起点を「チェーフ祭」歌群の模倣事件とその弁明においた。以降、「私は遍在する」という「確信」に至るまでの動きを、その下に位置づけられる下位分類のテーマ（「身体」や「記憶」等）に即して記述した。

ダイアログと〈私〉論が重なって一つとなると、本論の副題にもある「自己遡及的批評」という方法になる（第五節）。ある表現手段を使って表現をしながら、その表現を解体する方向へ表現を用いるような作品の在り方である。質問を投げかけ関係を持つこと、考えさせること、それによって自分を変えるきっかけを得させること、その質問を自らに浴びせることで自己の刷新も図ること。自己遡及的批評とはそのようなものであり、50年代、60年代を経て70年代に、天井桟敷の活動として一気に開花するような方法である。本論文のタイトルを「自己遡及的批評への途」としたのは、60年代がそれを得るための試行錯誤の日々とも考えられるためである。

第Ⅱ部「ダイアログの時代と世代——映像をめぐる比較作家論」は、他の芸術家たちとのダイアログを描いたものである。導入として、寺山より下の世代にあたる映画史家、四方田犬彦と寺山の関係を考えた後、映画研究者としての四方田の寺山に寄せる見解について考察した（第三章）。

第四章は、写真ジャンルにおける寺山の60年代の取り組みを記した。ここでは、六〇年代半ば頃に最も近寄りを見せる、写真家の森山大道、中平卓馬との仕事に注目する。彼らとの出会いと出来事（第三節）を素描した後、写真界で寺山のダイアログとほとんどよく似た概念を持っていた東松照明らの取り組みを確認したうえで（第四節）、中平、森山と組んで行なった連載（第五節）、及び三人の一致した理念の結実としての単行本『街に戦場あり』（1968年）を見る（第六節）。そこを頂点として、彼らは寺山と離れて行く。森山と離れたのは、方法論の重複がみられたからだという仮説を提示するのが、第七節である。第八節では、中平の評論「なぜ、植物図鑑か」（1973年）と、それに寄せた寺山の書評を精読し、彼らが離れた理由を藝術理念の齟齬と捉える。第九章では、70年代に入って、寺山が彼自身写真家としての仕事を始めたあとの展開について論ずる。そこには、仮想敵としての篠山紀信がおり、寺山は彼と競う形で、被写体との撮影を楽しむこと「だけ」を目指す写真を作っていくことにした。しかしそれは急逝により結実しないまま終わった。

第五章は、映画ジャンルにおける寺山の活動を、篠田正浩との関係から考える。ここでは、寺山と篠田の相互交渉の様子を論じるとともに、映画における影響受容関係の問題として、「オマージュ」という概念についても考察する。60年代に直接的に共作した寺山と

篠田の関係は、その後の篠田作品のなかにも顕れ、篠田監督作『少年時代』（1990年）において、高質なオマージュとして結実する。戦時下の生活を経験した寺山や篠田らの世代に生じた自他意識の消失が、そのまま映画に浸透し、同時代感情だけでないノスタルジーを呼び起こす、そしてそれが篠田—寺山の固有の関係へと収斂するということを論ずる。本章は、映画において影響受容をどのように論じうるかの事例でもあり、その意味では「オマージュ」を比較文学の理論に組み込むことも目指している。

第Ⅲ部「ジャンル特性の測定と遡及的活用——NHKアーカイブス資料を中心に」は、筆者が2010年から2014年にかけて、断続的に行なったNHKアーカイブス（川口）での資料調査を基に記されている。

第六章は、ラジオ番組を全般的に扱う中で、寺山がそのメディアに、魔力的親密さを嗅ぎとり、逆に利用したさまを描いた。第七章は、テレビ番組がいかに関文学研究に資するかという一般理論を、寺山が出演した作品その他を例に考えた。テレビ番組、あるいは映像の資料的価値とはなにか。幾つかに分類した（第三節）。また、没後における寺山受容の様子もまとめた（第四節）。第八章は、現存する最古の寺山脚本のテレビドラマ『一匹』の作品論である。寺山はこの作品をめぐる、ドラマとは違う結末を、雑誌に発表した際に提示するという興味深い実践をしている。そこに顕れた寺山のメディア認識、あるいは〈映像〉と〈言語〉の根本的な差異について寺山はいかに考えていたのかを考察する。第Ⅲ部を通じて確認されるのは、ラジオの魔力的なモノローグ性であり、メディアの形式や表現の手段から逆算してそれに即した詩情を提示しようとする寺山の戦略である。

第Ⅳ部「詩情と自己遡及的批評」は、寺山の頂点を成す、70年代の二つの傑作、映画『田園に死す』（第九章）と写真集『犬神家の人々』（第十章）についての作品論である。前者では、短歌と映像の関係を考え、そこに〈私〉論がいかに関展開されているかを検討する。後者では、写真ジャンルに写真家として参画した寺山が、早速にその問題系を全投入した怪作《母地獄》を論ずる。寺山には、圧倒的な詩情によって裏打ちされた、極めて理性的な批評精神があった。それらを最も優れた形で体現するのが、これらの作品である。

詩情とは、想念が芸術上の「かたち」を欲している状態である。自らに最も適したかたちを与えられるのを待っている想念である。それは、言葉や映像や、あるいは音楽や絵画など、さまざまな形で顕れる。テキストとは、そうして顕れた詩情の仮の姿である。表現されたものから遡って、〈私〉という詩情を徹底的に考察しようとする営みが、寺山の藝術であった。それは寺山が、1960年代に限らず、それ以前も以後も一貫して抱き続けた問題であったが、この問題意識こそが、60年代に、ジャンルを跨ぐ自己遡及的批評を生じさせた。固定的な形を持っているものは、反対に、それ以外の「かたち」である可能性を見なければならぬと考えたのである。既成概念は、寺山にあっては、破壊して無形に戻さねばならないものであった。メディアや表現形式の特性を見定め、それが人間にいずれもたらず、意識にすらのぼらない「常識」を、もう一度意識にのぼらせ批判的に捉えられるような仕掛けを施す。寺山の60年代を見ることでわれわれは、その方法が寺山の中でいかに練磨されていったかを確認出来る。